私は「curtain（カーテン）」というモチーフを手がかりに、風景の“見せかけ”と“実在”のあいだを探る作品を展示します。私にとっての curtain は、光を通し、外の景色がぼんやりと透けて見える薄く繊細な膜であり、現実とイメージの境界を象徴する存在です。

作品に描かれる風景は、まるで一般的な風景画のように見えますが、角の切り取られた構図や質感により、それがレースカーテンに映った風景、つまり「一枚の布の柄」としての側面も感じさせます。

奥行きを持って広がっているはずの風景が、一枚の面としてキャンバスに閉じ込められている——風景が“見えている”のか、それとも“模様として刷り込まれている”のか、そんな曖昧な感覚をテーマにしています。

日常の景色や旅先での印象的な風景でさえ、私たちはそれを完全に実感することは難しく、やがて記憶の中で緩やかに薄まり、馴染んでいきます。

風景のリアルとフィクションの間にある儚くも確かな感覚、またその曖昧さを浮かび上がらせた作品群です。

奥山 帆夏

私が作品づくりに用いる素材は、どれも身近にあるありふれたものばかりです。何度も手触りを確かめ、素材の特性に大きく抗うことは避けながら、自然と生み出される形象を模索します。サイアノタイプもまた、その日の太陽の光と風に現像を委ねることで、最終的な形状を自分の意思から少し遠ざけています。そうした揺らぎの中で、ある日私を取り囲む世界が作品に投影され、共振するとき、それは世界を知覚する装置として、意味を持って立ち顕れてくると考えています。

作品の本質はいつもその外側に存在します。物質としての作品は何も語らず、観る人が世界についての思考を始めるきっかけに過ぎません。人とモノとの間に、何かが生まれる前、性質や運動がまだ存在しない状態。私がつくろうとしているものは、作品の未然形なのかもしれません。

木下 理子

絵を描くことを通じて、生活のなかで感じる共同体の複雑さや、そこで生まれる隔たりについて考えています。本展に出品している作品は、とりわけものとものの間についての思索としています。

今借りているアトリエには小さな庭があり、しばしば草を抜いたり枝を切ったりしています。手入れを怠るとすぐに植物が生い茂り、落ち葉が散乱して通行を遮ってしまうので、この習慣を甘んじて受け入れています。これに似た構造はアトリエの中にもあって、一緒に借りているメンバーとの共生を考える時に、公共的に振る舞う一方で他者に与えてしまう影響について日々考えさせられています。

暗い場所で徐々に景色が目の前に表れてくるように、理解を通じてものごとの機微を捉え、少しずつ自分のなかでそれを形作りたいと思っています。またそうして世界を捉え直していくことを喜びにも感じています。このようなプロセスが生活と制作の交差点であり、現在における私の一つの応答であると考えています。

澤田 光琉

幼い頃、開いている窓から風が入ってきてその風によってカーテンが膨らむように揺れるのをじっと観ていました。私にはそれが風の姿だと思ったからです。

今回の作品群は長野県での体験を中心に制作しています。韓国から成田空港に降り立った後いつも祖父が長野まで車で運んでくれて、トンネルや山をいくつか超えると街の灯りが見えはじめた時の記憶、長野の実家に戻った際にいつも犬の散歩で通るりんごやももの畑風景などです。

絵画とは「作家がなにを見つめているか」ということの現れだと考えています。最近エジプト美術に関心があり、よくその関連動画を観ていますが、彼らの描く顔は横向きで身体が正面を向いている人物はそれが本来の魂の姿だと考えていたからしいです。それを知った時、彼らにとって絵画が見えないものの姿を捉える為のもう一つの目の役割をしていると感じました。

カーテンに当たって姿を現す風のように、私も感覚をキャンバスに当て風景との関係を見つめています。

白石 効栽

自身が見た風景や身のまわりの自然が作り出す現象を観察し取り入れた絵画を制作しています。私の住んでいる京都は盆地なので、アトリエや家のどの窓からでも山が見えたり、川が流れていたりして、自然に囲まれている環境です。制作に疲れたら窓の外を見たり、アトリエ周辺の川沿いを散歩したりします。川の水面をずっと見ていると、波紋が線に見えてきたり、奥行きが出たりひっこんだりして、同じ瞬間はありません。そうして見続けるうちに、表面的な要素だけでなく、この瞬間を形成する地形や土地の歴史へと意識が向き始め、肉眼では認識できない生態系までも一緒に見ようとして、見続けることを止められなくなります。

絵を見ている時も似ている瞬間があります。石の表面や苔の形をなぞり、見えないものは画面に描き起こすことで、風が吹いていたり、川が流れていたりする状態そのものを現すことができないかと考えています。風景の面影と画面との対話を横断して、壊れたり、行き詰まったりしながら、捕まえること自体をずっと続けているような感じです。

絵画と並行して陶器も制作しています。粘土は絵の具と似ていて、ずっと触り続けることができます。だけど絵の具よりはコントロールが難しくて、どうなるか分からない感じ、偶然性と必然性のどちらもあります。どこで手を止めるか見極めないといけないですが、続けていると思考と手が一緒に呼吸し始め、何か立ちあらわれる瞬間が必ずあります。

最近は制作中、手を動かすより画面を眺めている時間の方が長くなってきました。そんなわけないはずですが、眺めるという行為で制作が進んでいるような感じがします。やりたいこと、見たいことに段々近づけているような気がしています。

竹林 玲香